

11-1 ノバラ(ノイバラ) *Rosa multiflora* バラ科バラ属

品種

園芸種
パンプキン
野生種



作型及び出荷期

露地・実つき枝もの
出荷期：7～11月

特性

耐寒性が強く、露地栽培が可能である。一度植え付けをすると、何年でも枝切りが可能である。花期は5～6月、実つき切り枝での収穫は、8月中下旬から。

栽培管理

定植準備：10月に、挿し穂を十分水あげした後挿し木をし、1年間株を養成する。

成分	元肥(kg/a)	追肥(kg/a)	備考
N	1.0	0.5	緩効性化学肥料主体。
P ₂ O ₅	1.0	0.5	追肥は毎年秋に行う。
K ₂ O	1.0	0.5	樹齢、生育に応じて、施肥量は調整する。

定植：定植時期は、9～10月または3～4月。

畝間3.6m、株間1.4～1.8mで定植する。

挿し穂を十分水あげした後、そのままほ場に挿し木する方法もあり、省力化を図れる。

栽培管理：実ものなので、鳥害の危険があるところは注意する。病害虫については、バラ科に共通するものについて、定期的に予防的防除を行う。

収穫調製：地際より40～50cmのところで収穫し、葉を落として調製する。

枝物は用途が多岐にわたるので、実需者に応じた荷姿とする。

調製後、1晩水揚げして出荷する。

ほ場のようす



出荷荷姿



11-2 カナリヤナス

Solanum mammosum ナス科ナス属

栽培上の留意点

- 1) 排水性・保水性の良い土地が好ましい。
- 2) ナス科品目との連作を避ける。
- 3) 高温耐性はあるが、寒さに弱いので霜が降りる前に収穫を済ませる。



月 作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
露地栽培			∴		◎	+	—	×		↔		

(∴は種 ◎定植 +支柱立て ×摘心 黒 収穫) 摘葉 収穫 室内貯蔵

収量目標 180 本/a

品 種

無し（とげなしのなす とされる場合も）

性状・環境

生育適温 20~30°C (5°C以上)。草丈 1.5~2m。

育苗・鉢上げ及び管理

発芽適温は 25~30°C, 3月中下旬に播種する。本葉3~4枚頃に 9~12cm ポットに鉢上げし、1週間は地温 25°C, 活着後は 16~18°Cで管理する。

施 肥

元肥として三要素とも成分量で 2 kg/a, 堆肥は 100~200 kg/a 施用する。6月中旬に株元に窒素成分で 0.3~0.5kg/a の追肥を行う。秋まで肥料が多く残ると実がつきにくくなる。

定 植

定植は 4 月下旬~5 月上旬の本葉 5~6 枚の時が定植適期。黒マルチを張り、畝間 150cm×株間 100cm の 1 条植え。

支柱立て, 整枝, 摘心

倒伏防止のため、5 月中旬に支柱を立てる。地際部から下芽が発生するので、5 月下旬に下芽を除去する。側枝は 3 本に揃え、各枝に 7 段程度果房を確保したら摘心する。1 果房に 3~4 果。果実の着色を促進させるため、果実が充分肥大してから摘葉を行う。台風の前には、果実のすり傷と倒伏防止のため葉を全て落とす。

病害虫

病気：疫病 うどんこ病 ウイルス病

害虫：ヨトウムシ類 アブラムシ類

出 荷

全体に色がついたら枝を切り出荷する。

11-3 サクラ

Prunus spp. バラ科サクラ属

品 種

ヒガンザクラ
ケイオウザクラ



作型及び出荷期

出荷期：促成出荷～季節咲き出荷 1月中旬～4月中旬

特 性

[ヒガンザクラ]

エドヒガンとマメザクラの雑種。切り花向けの枝変わり品種が多い。樹勢が強く、枝切り後の枯込みが少ない。花は一重咲き、淡紅色でケイオウザクラよりやや大きい。促成時期は1月中旬以降が適する。

[ケイオウザ克拉]

シナミオウトウとヒガンザクラの種間雑種、またはシナミザクラ台木に接ぎ木したヒガンザ克拉の芽条変異といわれている。樹勢は強く、枝切りによる枯れ込みは少ない。枝はスプレー状で用途は広い。

花は一重咲きで小さく多花性である。花色は促成処理することにより鮮明に発色し、濃桃色から桃色を示す。

栽培管理

繁殖育苗：休眠枝（前年枝）または緑枝（当年枝）を挿し木するか、挿し木繁殖したマザクラなどを台木に接ぎ木する。育苗期間は休眠枝挿しで1～2年間、緑枝挿しでは2～3年間。

ほ場準備：堆肥、土壤改良資材を投入し、深耕する。元肥に成分量でN、P₂O₅、K₂Oを各1.5 kg/a程度施用しておく。

定 植：栽植密度は畝間4m×株間2～3m程度で、10aあたり80～120本。ヒガンザクラは苗木を地上80～100cmの位置で切り戻す。ケイオウザ克拉は切り戻さないが、新植4～5年目から花芽着生処理（環状剥皮処理）を行い、計画的に切り枝を収穫する場合には切り戻す。

栽培管理：施肥は早春に行い、成分量でN：1.2kg/a、P₂O₅：1.6kg/a、K₂O：1kg/a程度施用し、やせ地では有機物を投入する。整枝は休眠期に主幹周囲の不必要な下枝や折れ枝を整理する。

病 害 虫：てんぐ巣病、カイガラムシ類、アブラムシ類、アメリカシロヒトリ、コスカシバなどが発生する。休眠期、発生初期の適期防除を徹底する。

収穫調製：植え付け5～6年目から開始する。台つけ仕立ては枝の基部を5～10cm残して枝切りする。収穫の程度は、ヒガンザ克拉は樹勢に応じて、2～3年おきに全枝収穫する。ケイオウザ克拉は収穫できる枝を毎年2分の1から3分の1を間引き切りする。収穫（枝切り）時期は、促成処理直前。

荷姿は、実需者に応じたものとし、結束する。

促成処理：結束後しっかりと水あげをする。夜温10～15°C、昼間20～25°Cを目標に管理する。1～2輪開花したら、低温室（10°C）に移し、日中は外気に慣らす。

出 荷：2～3割開花したら出荷適期である。

11-4 ウメ(ハナウメ) *Prunus mume* バラ科サクラ属

品種

冬至梅 (白一重)
八重冬至
野梅
寒紅梅 (紅一重)



作型及び出荷期

促成 12月

特性

比較的低温抵抗性は高い。
品種分類としては、野梅性、豊後性、杏性、紅梅性に分けられ、野梅性はさらに、野梅性、紅筆性、難波性および青軸性の4つに分けられる。

栽培管理

品種選定：促成では一般的に早生品種を選定する。

苗木購入：必要量は予備を含めて100本/10a程度。

ほ場選定：日当たりが良く、西日の当たらない場所で、排水性・保水性が良いほ場を選ぶ。

定植準備：堆肥を投入し、pHは6.0程度に調整しておく。

定植：2月下旬から3月中旬に行う。

台付け：定植時に1.3mの高さで苗木を摘心する。

施肥：定植時に株の周りの表土に化成肥料をオール10で200g/本程度施用する。

栽培管理：12月に堆肥を10aあたり200kg程度、表土に混和する。

5月には化成肥料をオール10で10aあたり50kg程度株の周りの表土に施用する。

整枝・せん定は特に必要はない。

病害虫：春先にオビカレハの食害、アブラムシ類やカイガラムシ類の吸汁害とそれに伴うすす病の発生に注意し、適宜防除を行う。

花芽促進：5月中旬から6月上旬に主幹の基部から30cmほどのところを5mm幅で環状剥皮するか、針金を巻くと、枝の伸長を抑え花芽の着生が促進される。

収穫：定植から5~6年経過すると出荷可能になる。12月上旬に3~4年生の花芽の付いた枝を切り枝とする。

調製：切り枝の基部を斜めにそぐように切り、長さを揃える。汚れや傷みのある枝を除去し、3~4本を1束として結束する（1枝折り）。30枝折りを丸く束ねてさらに結束する（1丸）。近年、ホームユース・花束加工向けの短い規格も流通してきているので、実需者に応じた荷姿とする。

水あげ：丸束ごと、水揚げする。

促成処理：12月中旬に温度20°C、湿度80~90%で行う。出荷直前になったら、室温を下げる等で馴化する。

出荷：適期は、最もすすんだつぼみが緩んだ頃で、開花する前とする。



11-5 ツルウメモドキ *Celastrus orbiculatus* ニシキギ科ツルウメモドキ属

品 種

自生種



作型及び出荷期

露地・実つき枝もの

出荷期：10～11月

特 性

ツル性の落葉低木で、花は5～6月、実は10～11月に黄色に熟し、3つに裂けて中から黄赤色の種子を露出する。

雌雄異株なので、定植時には雌雄株割合を9：1程度にする。

栽培管理

苗の増殖：密閉挿しが適しており、挿し床には含水率の低い山砂を用いると良い。挿し穂には、枝の中央部を用いると、適量発根の割合が高くなる。挿し木時期は7月。

[密閉挿し]

十分にかん水した育苗箱をポリフィルムで完全に覆い、内部の湿度を保って発根させる方法。

定 植：枝の伸長により、隣接する株の枝が絡み作業に支障をきたすので、うね間2m、株間2m以上の距離で定植する。高さ150～180cmに直管パイプ等で支柱を組んで倒伏防止をして樹形管理すると、枝の生育が良く切り枝本数も多くなる。また、生育促進と雑草抑制のために黒マルチを張ると良い。

台 付 け：地際から100cmの高さで台付け（摘心）する。

出 荷：季節の先取り感を考えると、出荷適期は10月上旬である。枝に着生している葉は除去し、枝長及びボリュームにより5～10本にまとめ、結束を基本とする。また、枝物は用途が多岐にわたるので、実需者に応じた荷姿とする。

11-6 レンギョウ

Forsythia suspensa モクセイ科レンギョウ属

栽培上の留意点

- 植え付けは場は日照が十分にあるところを選ぶ。
日照不足だとつる性となり、花芽着生が減少する。



作型及び出荷期

出荷期：促成出荷～季節咲き出荷 1月中旬～4月上旬

月 作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
繁殖育苗			↓ (休眠枝)									
1年目						←仮植床→						
2年目			◎ (春定植)									
3年目			丁									
4年目			□□			□□□□□□□□□□□□□□	□□□□□□□□□□□□□□	□□□□□□□□□□□□□□	■			
	(芽吹き)						(青葉)			(紅葉)		
	■		丁							■		
	(↓挿し木)	◎定植	丁 整枝 (台付け)	せん定	■ 収穫・促成		□ 収穫 (葉物出荷)					

品種 レンギョウ

ジャイアントイエロー (青軸系品種)

特性

[レンギョウ]

枝は株元から発生するとつる性を示すが、株立ちになると直線的な枝になる。台付けによる枝づくりを行う。促成の主要品種。花色は濃い黄色でやや上向きに咲く。

[ジャイアントイエロー]

直立性の枝で樹勢が強い。花付きが良いが、早期促成には向かない。花色は濃い黄色でやや下向きに咲く。

栽培管理

繁殖育苗：3月中下旬に休眠枝(前年枝)を20～30cm程度に切り水揚げ後、仮植床に12cm×6cm、深さ6cmに直挿しする。

ほ場準備：堆肥、土壤改良資材を投入し、深耕する。10aあたり3要素を各15kg程度施用しておく。

定植と管理：栽植密度は畝間1.5m×株間70cm程度。定植当年は株養成とし、定植翌年の春に50～100cmの高さに台付けせん定する。地際から発生した強いシートに翌年側枝を出させてこれを収穫する。以後、毎年この作業を繰り返し2年枝を収穫し、1年枝を養成する。枝が混んでいる場合は間引く。

栽培管理：施肥は、早春に成分量でN:1kg/a, P₂O₅:0.8kg/a, K₂O:0.8kg/a程度を目安とする。

病害虫：コウモリガ、カミキリムシの幼虫などが発生する。発生初期の適期防除を徹底する。

促成処理：結束後しっかりと水あげをする。夜温10～15°C、昼間20～25°Cを目標に管理する。

出荷：2～3分咲きが出荷適期である。

1 アサガオ(アンドン仕立て)

Ipomoea nil (=Pharbitis nil) ヒルガオ科イポメア(サツマイモ)属

栽培上の留意点

- 1) 十分な光線の確保と適期管理により草勢を良くする。
- 2) つるが支柱の中段まで届いたら適宜巻き込みを行ない草姿を整える。



月 作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
6号鉢仕立て				↓—▽+ +								

(↓:は種 ▽鉢上げ + 支柱立て ■出荷)

品種

アンドン仕立て用の品種を選ぶ

暁シリーズ、富士シリーズ、桔梗咲きシリーズ、平安シリーズ

は種

1鉢当たり3~4本の植えこみを見込み、出荷予定数量の約2割増の種子を準備する。発芽を揃えるため一晩吸水させるが、種苗会社によっては、薬品処理したものも販売しており吸水不要の処理もある。は種は、4月上旬に行い、箱まきにする。3~4cm²に2~3粒をは種し、1.0~1.5cmの覆土をする。培養土は、赤土4、腐葉土6を目安に混合する。発芽適温は18~20°C、pHは6.0に調整する。

鉢上げとその後の管理

は種後、適温で管理すると4~5日で発芽する。子葉が展開し、本葉が動きだす前が鉢上げの適期である。時期は4月中・下旬となる。根を切らないように注意し、1鉢に3~4本を植え込む。

培養土は、赤土5、腐葉土5の割合で混合、pHは6.0に調整する。肥料は、緩効性粒状化成肥料(10-10-10)を培養土1リットル当たり3~4g施用し、成育状況を見て窒素濃度100ppm程度の液肥を追肥する。鉢上げ後、6月上旬頃まで20°C前後の温度で管理する。

かん水は、1日1回午前中(晴天)に行い光線には十分あてる。

草丈の伸びを抑えるため、草丈10~15cm時(葉葉5~7枚時)に矮化処理を施す。

つる巻き

5月上旬に支柱立てを行う。支柱は65cm、鉢の6カ所にさし込む。輪は、割竹か針金で20cmに作り、上中下に取りつけアンドンの形を作る。最近では市販のプラスチック製アンドンを使用する例もある。つるが中段にとどいたら下段に巻き込む。下段に巻き込む回数は2~3回とする。その後中段の巻き込みを2回程度行う。巻き込む回数は草勢により異なる。巻き込みと同時に、込み合っている所は整理し、通風、採光を良くするために鉢広げを行う。鉢数は、3.3m²当たり27鉢前後とする。6月中旬頃に花芽が確認できれば、7月上旬の出荷には十分間にあう。

病害虫

糸状菌病：白さび病 黒斑病 輪紋病 斑紋病 灰色かび病 つる割病

害虫：アブラムシ類 ハダニ類

調製・出荷

鉢と花のバランスを整え、3~4輪開いたものを出荷する。

2 アザレア *Rhododendron simsii* cv. ツツジ科ツツジ属

栽培上の留意点

- 1) 根は細く浅根性で乾燥に弱く、耐肥性も弱いので肥培管理に注意する。
 - 2) 品種の早晚性と最終摘心時期により出荷時期の調整を行う。



(↓さし木 ×摘心 →遮光 ▼鉢替え ◇保温 ◆加温 ■出荷)

品種

エリシェーム（早）、アンブロシアーナ（早）、レオポルド（中）、ピノキオ、マドンナ、ミッショベル、春の粧、晴朗、等

繁殖

1~2月(大株化可能)又は3~5月に摘心した芽をさし穂に利用し挿し木を行う。穂木を5~6cmに切り発根剤をつけ培養土に挿す。温度は17~20℃を保ち、60%程度遮光するが、強すぎる遮光は発根着生を遅らす。かん水は葉水程度とし、過湿を避ける。

培養十(割合)

	ピートモス	鹿沼土	パーライト	赤土	備考
さし木	5	3			pH 5.0 に調整した培養土で鉢上げする。
移植	5	4	2		
鉢上げ	5	5	1	2	
鉢替え	2	3		5	

育苗

生育適温 15~20°C、培養土は排水性が高く、適湿の保持ができるものを作る。根は細かく浅根性で乾燥に弱く、急激な多肥にも弱い。即効性の化成肥料は避け、緩効性の肥料(IBS1 等)を施す。

摘 心

開花期、草姿、花数を決める重要な作業で、鉢上げ後強い枝を中心に摘心をくり返す。10月出荷では4月中旬、11月出荷では4月下旬～5月上旬、2月～3月出荷では5月下旬が最終摘心時期である。草姿に丸みが出るように摘心作業を行う。

移植・鉢替

挿し木後は苗が十分発根した苗を、6月または9月中旬から10月中旬に箱移植する。この時、苗2本を一度に植えると、早くボリュームが出来る。鉢上げは、4月下旬から5月上旬に黒ポリポット(3.5~4号)に鉢上げし、5月下旬から6月中旬に伸びたものから順に枝の先端をピンチし、花芽を持つ枝を作る。6月中に最終ビ

ンチが終わるようすに作業する。鉢替えは株の大きさを見て、4.5～5号鉢に鉢替えする。

植物成長調整剤処理

樹形を整え、花芽分化促進、花芽着生を確実にするためにダミノジッド顆粒水溶剤を処理する。花芽完成後のアザレアは秋の低温、短日で休眠する。休眠は低温や90%程度の強度の遮光を10日間行うか、ジベレリンを散布することにより打破される。10月上旬の出荷鉢は9月上旬に処理を行う（約1ヶ月で出荷になる）。処理後は保温に努める。

病害虫

糸状菌病：もち病

害虫：ツツジグンバイムシ

調製・出荷

株全体が花色まわり2～3輪開花した時、配色を組み合せて出荷する。なお、6～7号鉢に仕上げる場合は、3～5株を寄せ植えにして出荷する。

3 アジアンタム(シダ類) *Adiantum raddianum* ワラビ科アジアンタム属

栽培上の留意点

- 1) 需要は周年あるが、特に春から初夏にかけての需要が多い。
- 2) 弱光、高温多湿を好むので栽培環境づくりが良品生産に欠かせない。



月 作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
4~7号鉢 仕立て			∴	∴			▽			▼		

(∴は種 ▽鉢上げ ▼鉢替え ◆加温 ■出荷)

品種

ラッディアヌム、フリツツルーシー、モノカラー、ミクロフィルム、スキュウタム・ロゼウム、クネアータム、フラグラヌス、等

繁殖実生

胞子繁殖が主体で4~5月と9~10月が主な播種期である。葉の裏についた完熟胞子を集め、新聞紙に包んで日陰へ干し、乾いたら細目のフレイで胞子だけを集める。播種箱にパーライトを3~4cm入れてよくたたき、その上に調整ピートを入れ、板等で軽くたたいて表面を締め、その後、充分かん水を行ってから、播種する。この上を新聞紙、ガラス、ビニール等で覆い、半日陰にして用土を乾燥させないようにする。

苗づくり

播種箱で発芽したコケに前葉体が発生したものからセル成型ポットに植え付け、生育を促進させる。

鉢上げ

葉枚数が4~5枚ぐらいになったものから鉢上げを行う。鉢の大きさに応じて1~3株寄せて植える。

鉢広げ

生育が促進してくると葉が互いに重なり合い、高温多湿でむれやすく、下葉が病気になり葉が枯れるので、生育に応じて広げる。

栽培管理

冬期は、最低温度15°C以上に保つ。遮光は夏期50%程度、春又は秋の強光の時は20%程度とする。かん水は冬期では乾いたら午前中にたっぷり実施し、4~10月は毎日行なう。

病害虫

ナメクジが発生しやすい。

調製・出荷

鉢と植物体のバランスを考え、十分なボリュームを付けてから出荷する。葉色が商品性を決めるので、出荷1ヶ月前から弱光にして淡い色調にして出荷する。

補足説明

播種から出荷までの期間は、仕上げ鉢の大きさに応じて(3.5~7号)、おおむね半年から1年強を要する。従って、前述のは種期(4~5月と9~10月が主)と仕上げ鉢の大きさ(出荷までの期間)を組み合せることによって周年出荷が可能である。ただし、需要等の面から、4~7月と9~12月を出荷の主体とすることが多い。

4 アツツザクラ *Rhodohypoxis baurii* キンバイザサ科 ロードヒボキシス属

栽培上の留意点

- 1) 梅雨期から夏期高温期に、球根腐敗やネコブセンチュウなどの病害虫が発生しやすい。
- 2) 根腐れを生じないような排水の良い培養土を用いる。
- 3) 早出し栽培を行うには、低温遭遇が必要である。



作型\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1~2月出荷				○	○		山上げ		山下げ	=====		
3~4月出荷		◆◆◆◆			○	○						

(○移植 ▽鉢上げ ===冷蔵 ■出荷 ◆保温)

品種

4倍体の広幅丸弁大輪種が主力で2倍体、剣弁小輪種もある。赤、白、ピンクがあるが一般に人気が高いのは赤、ピンク系の大輪種である。

用土・施肥

主に4~5月に3~3.5号鉢に3~5球ずつ植える。覆土は球根の先端がかくられる程度とする。培養土は排水の良い赤土5、腐葉土3、鹿沼土2を混合し、pH5.5を目安とする。分球活着後に、緩効性粒状化成肥料2~3g/鉢を施し、株の充実を図る。

栽培管理

高温時には寒冷紗で遮光し、鉢水分の乾きを見て1日1~2回かん水する。

<1~2月の早出し栽培>

7月中旬より10月中旬までの間、高温を回避し生育を進め、更に低温を早くから与えるため山上げを行う。なお、山上げ後は、鉢植えのまま3~5°Cで45日間程冷蔵し、その後、加温栽培に入る。

<3~4月の早出し栽培>

1月中旬まで凍らない程度の低温に当て（野積み）、低温量を満たした後、10°C前後に加温して管理する。1月中旬に、仕上げ鉢に少し浅植えとして鉢替えする。

温度管理

加温開始直後は十分にかん水し、夜温は18~20°Cに上げて開花を促進する。2~3輪開いたら10~12°Cに下げて花色を出す。かん水も控えめにする。

病害虫

ネコブセンチュウ

出荷

開花数が5~6輪以上開いた時を出荷適期とする。

5 カーネーション

Dianthus ナデシコ科ナデシコ属

栽培上の留意点

- 1) 出荷が母の日よりも遅くなると価格が安くなるので、母の日以前に出荷できるよう栽培温度によって出荷期を調節する。
- 2) 比較的多肥を好みため、生育期間を通して適切な施肥管理を心がける。



作型\月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5号鉢仕立て				■						▽	×	▼

(▽鉢上げ ▼鉢替え ×摘心 ◆加温 ■出荷)

品種 赤系：カンタービレ、レッドキャンディ

その他：さくらもなか、エクレア、シャボンローズ、ロマンスシリーズ、カリフォルニアシリーズ、セレクトスカーレットシリーズなど

鉢上げ

5号鉢仕立ての場合、9~10月に苗を購入しすぐに3号ポットに鉢上げする。鉢上げ培養土は、赤玉土：ピートモス：バーミキュライト：ベラボン=35:35:15:15等の配合で、排水のよいものを使用する。pH6.0前後、ECは0.3~0.5dS/mに調整する。

カーネーションは浅根性なので浅植えにし、加湿にならない程度にかん水し、活着後は十分光にあて株の充実を図る。

摘心

5号鉢仕立ての場合、出荷までに2回程度の摘心を行うが、1回目は鉢上げから3~4週間経過した苗の活着後に株元から3~4節の位置で行う。2回目は12月頃に各枝の分枝位置から3~4節の位置で行う。特に1回目の摘心は、確実に折り取るように行う。

2回目の摘心後、飛び出した枝は早めにソフトピンチを行う。

鉢替え

12月下旬~1月上旬に5号鉢に鉢替えする。鉢替え培養土は、鉢上げ培養土に準ずる。

温度管理

生育適温は昼温15~20°C、夜温10°C前後といわれている。実際には年内5~8°C、1月から10°C前後、3月以降は12~13°Cに加温する。鉢替え直後は、活着を促進するために夜温を高めにする。品種により最低夜温が異なり、ロマンスシリーズ、カリフォルニアシリーズは8°C以下になると生育が停止するので、高めにする。日中は25°Cを超えないよう極力換気に努め、茎が軟弱徒長しないようにする。

開花調節

栽培温度が開花に大きく影響するので、4月下旬から5月上旬に出荷するためには、3月中旬

にアズキ大の蕾がみえはじめるよう、温度を調節する。

施 肥

比較的多肥を好むため鉢上げ、鉢替え培養土には緩効性肥料を培養土1リットルあたり3g程度混合するとよい。また、活着後は緩効性の置肥などで追肥し、生育の状態をみながら窒素濃度100ppm程度の液肥で追肥する。摘心前の追肥は分枝を促進させるため有効である。

病害虫

細菌病：萎凋細菌病 斑点細菌病 立枯細菌病

糸状菌病：根腐病 疫病 うどんこ病 黒さび病 さび病 斑点病 褐斑病

すす点病 黒点病 灰色かび病 菌核病 白絹病 委凋病 立枯病茎腐病

害虫：ハダニ類 アザミウマ類 アブラムシ類 タバコガ ヨトウムシ類

調製・出荷

5~6輪開花した状態で出荷する。

6 ガーベラ *Gerbera jamesonii* キク科ガーベラ属

栽培上の留意点

- 1) 過湿条件下では生育不良や根腐れを起こしやすいので、排水を良くする。
 - 2) 日照不足は花数が少なくなるので、採光をよくする。



(∴は種 ▽鉢上げ ◆加温 ◇保温 ■出荷)

晶種

ハーモニー、F1フェスティバルシリーズ、トップシリーズ、ナインガーベラシリーズ、シャンデリア、ナインシリーズ、パンドラシリーズ、等
<ミニ種>フロリポットシリーズ、F1ジャガーシリーズ、メロディー等

播種

市販培養土に種子を1cm角にまき、種子がかくれる程度に薄めに土をかける。発芽適温は18~20℃であり、10日ほどで発芽する。

鉢上げ

本葉2~3枚のとき、2.5号ポットに上げる。植え付けする時は株元が安定するよう深植えをする（浅いと株がふらつく）。培養土は、赤土とピートモス、パーライトを等量混合した培養土に有機化成（8-8-8）等を1~2g/鉢加える。購入苗がセル苗であれば、直接仕上げ鉢に鉢上げする。

植物学

(仕上げ鉢) 本葉4~5枚で4号ポットに上げる。深く植えると花立ちが悪くなるので、芽の部分が地中に埋まらないように植える(育苗ポットが隠れる程度に土をかけ、浅すぎると株がふらつく)。培養土は鉢上げを参照。

施肥

活着後、液肥（20-20-20 または 20-12-20）4000倍希釈を施用し、花芽が形成された頃に緩効性粒状化成肥料（10-10-10）を1～2g/鉢施用する（置き肥）。

栽培温度

生育限界夜温は10°Cである。最低でも14~16°Cは確保するようとする。25°Cを越えると生育が緩慢になるので、日中は20°Cを目標に換気を行う（冬期は25°C目安）。

水

生育初期は十分なかん水を行った後、しっかりと乾燥させる。株がある程度生長したらから水量を増やす。

古舊整理

出荷期中盤から古葉の黄化がみられるようになるが、肥料成分が十分であれば発生は少ない。適正なスペーシングを行い、光が下葉まで十分当たるようする。

病害由

病害：斑点細菌病 ピシウム根腐病
疫病 根腐病 うどんこ病 花腐病 斑点病
紫斑病 炭疽病 灰色かび病
菌核病 白絹病 青かび病 茎腐病 半身萎凋病
害虫：コナジラミ類 アザミウマ類
チャノホコリダニ ハモグリバエ類 ハダニ類

販賣部

出荷盛期は3~5月。花の配色は赤4:桃4:黄3:白0.5:橙0.5の割合を目安とする。

7 カランコエ

Kalanchoe blossfeldiana ベンケイソウ科カランコエ属

栽培上の留意点

- 鉢物栽培の限界日長は12時間30分で、9時間日長で花芽分化する短日植物であるが、25°C以上の高温化では分化が抑制される。
- 現在主流になっている**blossfeldiana**系（写真）は、マダガスカルに産している原種をもとに品種改良されているため、極度の低温や高温を好みない。



	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
3~5 号仕 立て	☆☆☆☆☆						★★★★★				★★★★★	

(↓さし芽 ☆電照 ★シェード ■出荷)

品種 ボール咲き：ミリオンスター（一重），カランディーバ（八重），
クイーンカランコエ（一重），ローズフラワー（八重）
つり鐘咲き：エンゼルランプ，サンライズ，ウエンディー

さし芽 親株用に育成したものから5cm程度の芽を採穂し、下葉を落とし、1~2日程度日陰で穂の切り口を乾燥させた後、用土に1cm程の深さで挿す。採穂するとき刃物は消毒して使う。花序ができるものは、側芽の萌芽を抑制する作用が強いため用いない。土は、肥料は入れず赤玉、川砂、バーミキュライト等の排水の良い培養土に箱ざしとするが、鉢直ざしでも良い。発根の適温は20°C前後で、さし芽後1週間程度は遮光下におく。多肉植物なので乾燥に強く過湿に弱いためかん水を控えめにする。

鉢上げ さし芽20日後、発根を確認して鉢上げする。培養土は赤玉：腐葉土：パーライト：バーミキュライト=4:4:1:1など排水の良いものとする。高温多湿は病害が発生しやすく、過湿は地際からの根腐れをおこしやすい。日中25°C以下を目標とし、盛夏期は50%程度の遮光を行う。

施肥 培養土 1 m² 当り N : 150g, P₂O₅ : 200g, K₂O : 250g を元肥に入れておく。pH (KCl) は6.0~6.5を目標とする。その後は生育状況に応じ500~1,000倍の液肥を追肥する。特にサンライズの品種は葉片が褐変しやすいので肥料切れに注意する。

摘心 鉢上げ後20日程度で側芽が見え始めるので、3~4節を残し摘心する。鉢の大きさによっては2回目の摘心を行う。芽数を多くし、また伸び過ぎを調節する。

開花調節

9月下旬~3月中旬は自然日長で花芽分化する。12月出荷では、9時間日長の短日処理を行う。処理は摘心後の側芽の展開葉節が2節以上になった頃（さし芽後80日程度）が良く、7~10日で花芽分化し、30~40日程度で発蕾する。日中最高25°C以下が条件となるので平地では困難である。

温度管理

生育適温は15~20°C。18°C以上を必要とする品種もあるが、一般に夜温は10°Cあれば良い。花芽発達は高温で前進する。5°C以下では生育が止まる。

病害虫

病気：萎凋細菌病、根腐病 痘病 斑点病 さび病 灰色かび病

害虫：ヨトウムシ類、アブラムシ

出荷 出荷予定（5~6分咲き）1週間前から夜温を2~3°C下げ、花色を濃く株を締める。

8 カンパニユラ類

Campanula キキヨウ科カンパニユラ属

栽培上の留意点

- 1) さし芽、株分け等を早めに行い、株の充実を図る。
- 2) 低温遭遇、電照などをうまく組み合わせ、計画的な開花調節を図る。最近は低温処理が不要な品種が販売されている。



作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
3号ポット	▽	◆	☆	■								↓
4・5号鉢	▽				(山上げ)	◆	☆		↓

(↓ さし芽 ▽鉢上げ ◆加温 ☆電照 ■出荷)

系統 *C. portenschlagiana* (ベルフラワー, ゲットミー, オーシャンシリーズ), *C. carpatica* (ブルーボール, パールブルー), *C. cochleariifolia* (ブルーワンダー), *C. poscharskyana* (アルペンブルー) 等

繁殖

9~12月に、親株から採穂し、セルトレイ (200穴等) を用いてさし芽を行う。培養土は、ピートモス、バーミキューライトなどを混合した窒素分の少ないものを用いる。

株分けで繁殖させる場合は、5月頃に5~6本を2.5号ポットに分ける。

パテント品種は苗を購入して生産する。

鉢上げ

さし芽から約1ヶ月半育苗した後、3号ポットに鉢上げを行う。

培養土は、例えば赤土6:腐葉土4に苦土重焼磷とロング180日タイプを培養土1リットルあたり2~3g混合したものを用いる。

促成管理

3号ポット苗で3月に出荷するものは、12~1月に戸外または無加温のパイプハウスに出して充分寒さに遭わせる。1月中旬以降に入室し、電照と加温を開始する。入室後は充分光を当て、肥料切れにならないように注意する。電照時間は夜11時から午前2時の暗期中断3時間とし、6週間程度行う。それ以降は自然日長で管理する。開花を促進する時は15°C以上が望ましい。

4~5号鉢の管理

4号、5号で次年に出荷するものは、高温期には寒冷紗の下で涼しい所で管理する。山上げで夏越しさせるのが望ましい。充分な寒さに遭わせてから10月上旬頃、山下げを行う。11月上旬頃から電照と加温を行うと1月下旬に開花する。加湿にならないように注意する

病害虫

細菌病：褐斑細菌病 青枯病

糸状菌病：疫病 褐斑病 根朽病 斑点病 菌核病 白絹病 根腐病

害虫：アブラムシ類、アザミウマ類

出荷

5~10輪開花したら出荷する。

9 クレマチス

Clematis L. キンポウゲ科

栽培上の留意点

- 1) 耐寒性はあるが、夏の暑さに弱いので、遮光や通風をよくする。
- 2) 特に灰色かび病、肥培管理、ピンチ、つるの整理に注意する。
- 3) クレマチスには多くの品種があり、品種により着花習性や低温要求量が異なる。これらの特性を考慮して仕立て法や加温開始時期を決める。



作型 \ 月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
5号鉢仕立て 促成 (1年目)				↓	—	↓						
(2年目)					▽	—	▽					
(3年目)	◆	—	■	▼	—	▼		×	—	×	(摘心2回)	
	(↓さし木	▽鉢上げ	▼鉢替え	×	摘心	◆加温	■出荷)					

品種 H・Fヤング, ミゼットブルー, 白万重, 仙人草, ドクターラッペル, ニオベ, 北浜, 仁井田, 阿吹, マジックファンティン, マダム・ジュリアン・コレボン, カルトマニージョー, テッセン

さし木 4~7月にさし木するが、主に管ざしで行う。(頂芽ざしの場合、花芽がつくことがあるため) 穂木は2節で切り、下1節の葉を切る。培養土はパーライトやバーミキュライトなどを使用し、30×40cmの育苗箱に200本前後さすが、下の1節が培養土内に入るようにさす。カビの発生に注意し、50%程度の遮光をする。

鉢上げ さし木して1.5~2ヶ月後、根を切らないように3号ポリポットに赤土7, 腐葉土3の割合で混合した培養土を入れて植える。鉢上げ後、活着するまでは50%程度の遮光をする。株のボリュームがでにくい品種は2~3本植えとする。

鉢替え 鉢替えは翌年の4~6月に行い、出荷期までに株を充実させる。

摘心 鉢替え後、新梢が5~6節伸びた時、下から1~2節残して摘心、更に1ヶ月後2~3節残して摘心し、数回の摘心で枝数を確保する。(生育旺盛な品種の場合)品種によっては摘心をせず、そのまま伸ばす場合もある。

施肥 鉢上げ苗の活着を見て、IB化成等の置肥を施用する。様子をみながら液肥等も併用する。鉢替え後、最終追肥は10月上旬~中旬とする。

温度管理

夏期は寒冷紗などでできるだけ涼しくし、冬は凍らない程度の低温に十分合わせ、1月中旬以降入室し、新梢が十分伸びるまで夜間10°C以上を保ち、以後株を締めるために夜温を下げる。

(品種により低温要求量が違うため、入室時期は前後する。カルトマニージョー等は1月上旬から入室可能。)

かん水 比較的水分を多く必要とする作物なので、乾燥しないように注意する。

あんどん あんどん作りでは、休眠と同時に、あんどん用支柱を立て、旧枝を巻きつける。

支柱立て 旧枝咲き品種の中でもH・Fヤングなど着花枝が長いものは、ある程度伸びてからあんどんに巻きつける。新梢咲き品種では、新梢が20~30cm伸びたら、支柱を立て新梢を巻きつける。

病害虫 細菌病：根頭がんしゅ病

糸状菌病：うどんこ病 灰色かび病 赤渋病 白絹病

害虫：ハダニ類 アブラムシ類 ホコリダニ アザミウマ類 ヨトウムシ類

調製・出荷 花が1輪開花した時が適期である。

10 クンシラン(鉢物類) *Clivia miniata* ヒガンバナ科クリビア属

栽培上の留意点

- 1) 優良な採種用親株の選抜が重要で、受粉後約9ヶ月を経過したタネを採取後に果肉を除去し、水洗後播種する。
 - 2) ベンチ下栽培も可能であるが、良品生産には50%程度遮光した光条件の中で栽培する。
 - 3) 播種から出荷まで4~5年かかるため、出荷量の急変が少なく市場価格が安定しやすい。



品種 ダルマ系, 斑入り種, 黄花種

繁殖

株分け法もあるが、一般に実生法が多い。採種選定株が開花した3日後に、雌しべ先端に交配する。約9ヶ月後、種子が赤くなったら、直ちに果肉を除去し、水洗後播種する。

培養土は赤玉、川砂等を用い、3cm角に播き、種子が覆われる程度に土をかけ、乾燥させないように管理する。育苗培養土のpHは6を目安に調製する。播種後、20°Cで管理すると、約4ヶ月後に90%発芽する。

鉢上げ

9月に3.5号ポットに鉢上げする。培養土は保水性と通気性が大切で、赤玉土6, 腐葉土3, 川砂0.5, くん炭0.5の割合で混合した培養土等を用いる。pHは6を目安に調製する。翌年(3年目)は、3.5号ポットで管理し、4年目に仕上げ鉢(5号鉢)に上げる。

施肥

培養土には腐葉土と少量の元肥を入れ、4～9月の間に油粕、骨粉、米ぬか等の配合乾燥肥料や粒状肥料等を施す。

その他の管理

生育適温は15~20℃である。夏期は温度を下げるためにも遮光を行う。根は乾燥には比較的強いが、過湿には弱いので、水のやりすぎに注意する。ただし、かん水時には鉢内全体に行きわたるよう多めに与える。

開花鉢の管理

花芽分化は、葉数が17枚程度で始まる。11月から12月に5~10°Cの低温を40日程度受けると花芽は分化・発達する。そのため、開花相当株は霜を直接あてず、出来るだけ低温に合わせ、日中も出来るだけ涼しくする。12月下旬から1月上旬に加温をして約15°Cで管理すると、30~40日で蕾が見え始める。

出荷時に高温多湿にすると花茎が軟弱に徒長するので換気に注意する。

病害虫

糸状菌病：白絹病 (高温時に多い)

出 荷

花茎抽出後は、葉の汚れを落とし、出荷する。

11-1 ゴールドクレスト(3号鉢)

Cupressus macrocarpa ヒノキ科イトスギ属



栽培上の留意点

- 1) さし木育苗時、発根まで期間が長く乾燥を嫌うので注意する。
 - 2) 育苗時、肥やけや水不足に注意する。また、移植時に根が折れやすいので刺激を与えないように注意する。

品種 ウィルマ
さし木

11月頃にさし木する穂を採取する。当年枝の木化しかけたものを用い、10cm程度に調整、水揚げし、発根を促進させる。6~8月のさし木は避けたほうがよい。挿し床は、オアシスやメトロミックス等を用い、1.5cm間隔でさし木を行う。

さし木後、発根しカルスができる1か月後まで、トンネル等で閉め切り土の湿度(水分60%程度)を保ち、遮光率60%で遮光を行う。

鉢上げ

3月中旬に3号鉢へ鉢上げする。培養土は、赤玉土3:ピートモス3:腐葉土2:くん炭1:パーライト1等を混合して用いる。その後、必要に応じて5~6号鉢に鉢替えする。

施肥

鉢上げ時の元肥に土 1 リットル当たりマグアンプ K (6-36-6-Mg 16) を 3 g, サンライム 2 g, アズミン (腐植酸) を 2 g それぞれ施用する。追肥は、鉢替後 1か月後から 1 月ごとにプロミック (12-12-12) を 1 粒施肥する。

温度管理

最低夜温はさし木後4月まで15°C以上を目標に保温・加温を続ける。

かん水

十分なかん水が必要であり、生育が旺盛になれば乾かさないようにかん水する。雨が葉に溜まると病気が発生しやすい。

病害虫

ハマキムシ類, ヨトウムシ類

調製・出荷

ライトグリーンの葉色が売り物であるが、光線不足は軟弱徒長するので、光を十分に当てることが大切である。仕立ては自然樹形が一般であるが、スタンド仕立て等の造形ものも多くなってきている。